

研究ノート

インドネシア・バンガイ諸島のサマ人の外洋漁撈と空間認識

中野真備*

Outer Sea Fishing and Spatial Cognition of the Sama-Bajau People in the Banggai Islands, Indonesia

NAKANO Makibi*

The Sama-Bajau peoples are maritime populations living on various islands in several Southeast Asia nations who are known for their traditional sea-nomadic lifestyle and coral reef fishing. However, some Sama-Bajau people have settled on islands in “non-coral-reef” zones. This study aims to examine the open ocean fishing practices and spatial cognition of these non-nomadic Sama-Bajau people in the Banggai Islands, Central Sulawesi, Indonesia. After intensive participatory observation and interviews, it was found that the main fishing method of the study population was angling in the open ocean and not net fishing in coral reefs, in contrast to the results reported in previous studies on the Sama-Bajau people. The sample in this study classified sea space into 12 categories based on submarine topography; however, fishing sites were chosen depending on specific characteristics of each point regardless of these space categories. When identifying fishing spots, fishers considered not only submarine topography, but also the shape of islands as observed from the spot, stars visible at the time of identification, and other related details. By comparing these findings with those of previous studies, it was concluded that the populations in the non-coral-reef zones have developed a “spot-based understanding,” while those in the coral reef zones have developed “surface-based understanding.” This difference can be understood as a result of adaptation of the Sama-Bajau peoples to varying geographic conditions.

はじめに

自然とともに生き、自然を利用することで成り立つ生業を営む際、人々は知識や技術を形成し、これを媒介として自然を理解し、利用してきた [安室 2005, 2016]。現代の知識や技術は道具や機械をとともなうこともあるが、機械の発展以前は在来の知識・技術によるところが多

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2019年4月16日受付, 2019年9月10日受理

かった。このような民俗技術は、単に生業を営む手段であるだけでなく、自然観や環境認識など生活文化の基底を成すものでもあった。しかし今日、機械化はさらに進み、漁撈においてはエンジンやGPS（Global Positioning System, 全地球測位システム）、大型漁船の導入などが進んでいる。近代的な技術の普及により、在来の知識や民俗技術は後進的で不正確なものとされることもあった。これは東南アジア諸国においても例外ではない。近代化以前あるいは近代化の途上にある地域で、在来の民俗技術は今まさに衰退・変容しつつある。いま在来の民俗技術を見出し記録することは、地域の生活文化を研究するうえで早急に取り組まれるべき課題のひとつである。

東南アジア島嶼部には、海洋志向の強いいくつかの民族集団が存在する。そのなかで、サマ（Sama）あるいはバジャウ（Bajau, Badjau, Bajo など）と呼ばれる民族集団は、インドネシア東部、マレーシア・サバ州、フィリピン南部を中心に分布しており、広域に拡散している点において特徴的な海洋民である。ここで民族集団の表記については、「サマ」は自称、「バジャウ」は他称とされているが [Nimmo 1968; 床呂 1992]、研究においてはバジャウという表記のほうが定着している。しかし本論文で対象とするインドネシア・中スラウェシ州のサマは、バジャウという語は多民族からの他称であり、サマと呼ばれることを望んでいる。そのため本研究では、民族集団の表記はサマ（人）に統一する。

サマ人を対象とした研究は、フィリピン南部からサバ州東北端にかけてのスル諸島周辺域を中心に、少なからぬ研究者たちにより蓄積されてきた。しかし、次の2点においては、研究領域の偏りを指摘できる。

第一に、学術的関心の偏りが挙げられる。サマ研究は、広域に拡散した民族集団の起源と移住の歴史 [Sopher 1977 (1965); Nimmo 1968] やその言語学的分類 [Pallesen 1985; Grimes 2000] といった関心にはじまり、近年では国家や宗教との関係性からアイデンティティの創出ないし再編を論じた研究 [青山 2006; 長津 2004]、移動性や海域ネットワーク [長津 2012, 2018] といった領域にまとめられる。また、海洋民研究の傾向について、秋道智彌は、海の文化人類学や民族学であっても、「実際は陸上の活動に焦点をあてた研究が多い」とし、「海には文化や社会の問題を扱う素材などないとして、陸上（民を対象とする研究）における既成の問題領域にのみ学問的な関心を集中し、海を含む自然との総合的なかわりを追求する視点」を欠いていることを指摘している [秋道 1995: 2]。また長津一史は「これまでの研究は、サマ人が専門的な漁民であり、海洋環境に深く関わっていることを強調しながらも、かれらの漁撈活動そのものやその背後にある環境認識には十分に注意を払ってこなかった」と指摘している [長津 1997]。インドネシア島嶼部の海民全体をみても、漁撈の空間利用を通して環境認識に言及した報告は多くない。

第二に、調査地域の偏りが挙げられる。先行研究のうちサマ人全体を対象とした言語学や歴

史学の研究を除いて、現地調査に基づく研究をみると、スル諸島周辺域に特に集中している。また、フィリピン・ダバオ市のサマ人の研究 [青山 2006] を除くと、これらの研究は発達したサンゴ礁の上、あるいはそのごく近くに建てられた集落が対象とされてきた。その結果、サンゴ礁域に生きるサマ人の漁撈活動や環境認識が、サマ人の典型例のように扱われてきた。しかし、実際にサマ人が分布する地域には非サンゴ礁域も含まれ、サンゴ礁域を生活空間としない者も存在する。また海上から陸上へ生活の場を移した例や、沖合にサンゴ石灰岩を積んで人工島を築いた例も多くみられるようになった。このようにサマ人の漁撈活動は、これまで蓄積されてきた成果のみでは捉えきれないものである。

そこで本研究では、先行研究の中心地域から離れ、空白地帯ともいえるバンガイ諸島を調査地とし、次の 2 点を目的とする。第一には、これまで記録されてこなかった非サンゴ礁域という地理的特徴をもつ集落のサマ人の漁撈活動の現況を資料的に提示することである。第二に、この地域におけるサマ人の環境認識を明らかにし、島嶼部東南アジアの海民の民俗技術についての新たな議論の基点とすることである。この目的にあたり、まずこれまで報告されてきたサマ人の漁撈活動と環境認識、特に空間認識に着目してその特徴を整理する。次に、参与観察と聞き取り調査から明らかになったバンガイ諸島のサマ人の漁撈活動状況と空間認識を、先行研究と比較することを通して、バンガイ諸島のサマ人にみられる海の空間認識の特異性を検討する。

1. サンゴ礁域を生活空間とするサマ人の漁撈活動と空間認識

1.1 「漂海民」サマ

東アジアおよび東南アジアの島嶼部沿岸地域には、漁撈を営み、船上生活をおくる集団があった。東南アジアではサマ人のほかに、オラン・スク・ラウト (Orang Suku Laut)、モーケン (Moken) が挙げられる [Sopher 1977]。かれらは「漂海民」などの言葉で総称され、特にサマ人は船上居住と移動性の高い生活形態から、「海の遊牧民 (sea nomads)」、「海のジプシー (sea gypsy)」などと呼ばれることもある。しかし、近代化とともにサマ人の伝統的な生活様式は変容しつつある。すでに家船 (住居を兼ねる小型の舟) には居住せず、浅瀬や陸地に家屋をもつようになり、もはや今日のサマ人に「漂海民」と呼ぶべき集団はいないとすらされている。このような変化がありつつも、かつての移動生活の結果、現代でもフィリピン南部からマレーシア・サバ州、インドネシア東部に至るまで広く分布しており、かれらの独自の海域ネットワークでは、ヒトやモノが動き続けている [長津 2018]。船上居住をやめたものの、かれらの生業は依然として漁撈がその中心にあり、海上交易や海産物の加工もおこなわれる。

こうしたサマ人という集団について、本論文では「サマ諸語を日常的に話し、一般に自らをサマと名乗る人々」 [長津 2012] とする。インドネシアでは、カリマンタン (Kalimantan)

島、スラウェシ (Sulawesi) 島、小スンダ (Lesser Sunda) 列島からハルマヘラ (Halmahera) 島周辺まで、広域に分布している。本研究の調査地域はこのうち中スラウェシ (Sulawesi Tengah) 州バンガイ (Banggai) 諸島ペレン (Peleng) 島に位置する。

1.2 サンゴ礁域における漁撈活動と空間認識の先行研究

先述したように、サマ人の漁撈活動や環境認識にふれた研究は多くない。クリフォード・セイザー (Clifford Sather) によるサバ州南東部のサマ人の漁法についての研究 [Sather 1985]、スル諸島のサンゴ礁域のサマ人の漁撈活動と海の空間認識についての研究 [長津 1997]、ボルネオ島東岸域のサマ人の漁撈活動を過去と現在で比較した研究 [小野 2011] のみがあり、そのなかでも漁撈活動に論の基軸をおいている点では、長津と小野による研究が代表的である。

ここでは、スル諸島サマ人の事例 (表 1) とボルネオ島東岸のサマ人¹⁾ の事例 (表 2, 3) を示し、サンゴ礁域のサマ人の漁撈活動を整理する。

まず漁法の面からいえば、サンゴ礁域で多様な網漁をおこなうことが特徴である。これは水深が浅く、多種にわたる魚類が生息するサンゴ礁域では釣り漁よりも網漁の効率が高いことによる [小野 2011: 282]。表 1 では網漁を水路・礁内水道 (passage) でおこなうが、これは潮

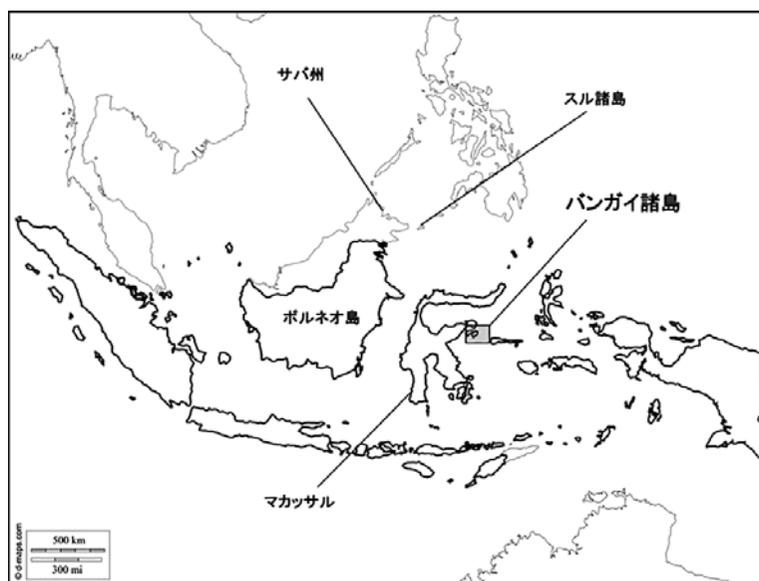


図 1 バンガイ諸島とスル諸島周辺海域の位置関係

出所：d-maps.com に筆者加筆。

1) 18 世紀のスル王国時代、「家船居住による移動生活を基本とし、特殊海産物の捕獲を中心とする漁撈活動に従事してきたグループ」を「海サマ」と呼び、一方で船乗りや海賊としても活躍し、家船居住をおこなわなかった定住性の高いサマを「陸サマ」と呼ぶ [小野 2007]。

の満ち引きとともにサンゴ礁域の内部と外部を魚が行き来する際に、水路を通ることを利用するものである。利用空間の面からいえば、その多くが水深 10 m 以浅のサンゴ礁域でおこなわれる点が挙げられる。長津 [1997] は、サンゴ礁による地形（海底）とその海水・海面上

表 1 スル諸島のサマの漁撈活動

漁法		利用空間
網漁	追い込み漁	蔦を使った追い込み漁（数回／日）
		蔦を使った追い込み漁（1 回／日）
		袖網を使う追い込み漁
		棹を使った集団追い込み漁
刺し網漁	刺し網漁	礁池，サンゴ礁内の水路，礁原
	舟で刺し網を曳きまわして魚をからめ獲る網漁	礁池
一時定置網漁		礁原
囲い網漁	クロサギ囲い網漁	マングローブのいりくんだ島の沿岸
	浅いサンゴ礁での囲い網	島の周囲の浅いサンゴ礁池，特にその窪地の周辺
釣り漁	手釣り漁	礁池，サンゴ礁内の水路，礁縁
	疑似餌を使った手釣り漁	礁池，水路，サンゴ礁内で水深 1 m 以上の場所
	延縄漁	礁縁，水道あるいは外海
突き漁	夜の突き漁	サンゴ礁
	夜のエイ突き漁	サンゴ礁
その他	植物の毒を使った魚毒漁	礁原

出所：[長津 1995, 1997] をもとに筆者作成。

表 2 ボルネオ島東岸の陸サマの漁撈活動

漁法	利用空間
網漁	追い込み刺し網漁
	礁池～礁原
	エイ漁
	礁池～礁原
	カニ刺し網漁
	礁池～礁原
釣り漁	手釣り漁
	礁池～礁縁
	疑似餌釣り漁
	礁池～礁原
突き漁	棒突き
	礁原
	ナマコ突き
	礁原
魚毒漁（毒漁）	礁内の浅瀬
潜水漁（潜水＋水中銃）	礁原・礁縁
籠・笊漁（籠＋笊）	礁原・礁縁
シャコ罟漁（仕掛け罟）	礁原
ダイナマイト漁（爆発＋潜水）	礁原・礁縁
採集（徒歩＋手づかみ）	礁原
海藻養殖（アガルアガルの栽培）	礁池～礁原
蓄殖（活魚の養殖）	礁池～礁原

出所：[小野 2007, 2011] をもとに筆者作成。

表 3 ボルネオ島東岸の海サマの漁撈活動

漁法	利用空間
網漁	蔦追い込み漁
	礁内水道
	追い込み刺し網
	礁池～礁原
	引き網漁
	礁池～礁原
	まき網漁
	礁内の浅瀬
釣り漁	手釣り
	礁池～礁縁
	延縄
	礁池～外洋
	疑似餌イカ釣り
	礁池～礁原
突き漁	棒突き
	礁原
	ナマコ突き
	礁原
	エイ突き
	礁原～外洋
魚毒漁（毒漁）	礁内の浅瀬
籠・笊漁（籠＋笊）	礁原・礁縁
潜水漁（潜水＋水中銃）	礁原・礁縁
シャコ罟漁（仕掛け罟）	礁原
採集（徒歩＋手づかみ）	礁原

出所：[小野 2007, 2011] をもとに筆者作成。

部分を加えてサンゴ礁あるいはサンゴ礁空間「*t'bbā*」と呼び、サマ人の漁撈活動の諸特徴は、それがサンゴ礁空間「*t'bbā*」でおこなわれることにあり、「サンゴ礁空間を特別に重視し、詳細に分類・把握している」とした。小野 [2007] はボルネオ島のサマ人の漁法の変化を指摘しつつも、漁撈空間が沿岸サンゴ礁域に限定されていることを伝統的な漁撈との共通点として挙げている。

漁撈活動全体についてまとめると、発達したサンゴ礁域における多様な沿岸性漁撈 [小野 2011: 281-284, 432] という特徴がある。海の空間認識の特徴についていえば、その特徴は長津 [1997] が指摘するように、サンゴ礁空間の重要性である。さらに、適した漁場の位置情報などを特定・共有する必要性がないことと、海の空間を全面的に記憶していること [長津 1997] が特徴づけられる。この他に、小野 [2007, 2011: 281-284] は、「漁撈活動への女性や子供の参加」、「漁船や漁具、出漁人数の小規模性」、「潮汐や季節性による制約」をサマ人の漁撈活動の特徴として指摘する。

サンゴ礁域で漁場を特定する場合、昼間は海底を視認してサンゴ群やわずかな窪みのような特徴を読み取ることで位置を把握して到達できる。これらの集落では、数十キロメートルを超えるような外洋域へ出漁することは一般的ではなく、日本でいうヤマアテのように、遠くにある陸上の目標物を見て自船などの位置を把握する [卯田 2000] という位置特定技術の必要性は低い。これらの地域においては、サンゴ礁空間は漁場であると同時に、日常的に生活する空間でもあることから、海底を記憶することは漁師だけの技能ではない。

2. バンガイ諸島のサマの漁撈活動と空間認識

2.1 調査地域の概要

現地調査²⁾をおこなったK村は、インドネシア東部の中スラウェシ州バンガイ諸島県の行政村落で、人口3,793人、1,010世帯(2017年K村役場提供)の大集落のうち、大多数をサマ人が占める。バンガイ諸島は1930年代と2000年5月20日に地震と津波の被害を受けた [Neal 2000]。2000年の津波発生時、沖合の完全な杭上集落であったK村は全壊した。当時あった4つの小集落のうち、3小集落が湾岸に移転し現在のK村を形成し、1小集落は対岸に新しくL村を形成した。本論文では、移転前の集落を旧集落、移転後の集落を現集落と呼び、単に「K村」という場合も現集落を指すものとする。

2) 2017年～2019年にかけて断続的に計約9ヵ月間の現地調査をおこなった。聞き取り調査では主にインドネシア語を用い適宜サマ語を併用したほか、協力者1名がインドネシア語とサマ語の通訳をおこなった。漁撈活動については漁師間で「海をよく知っている」とされる漁師を中心に15名を対象として聞き取った。GPSを用いた漁撈ルートの追跡調査もおこなった。15名のうち3名に加え、引退した元漁師で「海をよく知っている」とされる男性1名を対象として、漁撈知を詳細に聞き取った。本論文におけるサマ語の表記については、中野 [2018] に基づく。

K 村は、少なくとも 1927 年発行の地図に K 村旧集落に該当する地点に小さな島として記録されている。K 村はバンガイ諸島の中心的なサマ人集落として知られ、K 村から外に移住した住民により形成されたとされる村が諸島内に広く散在する。

K 村の地理的な特徴のひとつには、サマ人集落としては珍しくサンゴ礁域にないことが挙げられる。バンガイ諸島最大であるペレン島の東岸の湾に位置し、周辺はマングローブを含む汽水域と、干潮時に一部が海面から露出する砂泥地があるばかりで、サンゴ礁はほとんどみられない（図 2）。湾を越えるとすぐに深い外洋にはいる。集落の約半分は陸上の家屋であり、その他は海上の杭上家屋と、サンゴ石灰岩を積み上げた人工島に築かれた家屋である。バンガイ諸島の島々は石灰質の土壌で [Tony *et al.* 2012], K 村のすぐ背後も石灰質の岸壁が迫っている。住民らによれば、かつては外洋の手前に小さいながらもサンゴ礁域があったが、ダイナマイト漁で破壊しつくしたという。しかしながら、他地域のサマ人とは異なり、K 村のサンゴ礁域とその利用は、この地に人々の居住が始まったときから現在まで、ごく限られたものであった。K 村のある湾が「赤い湾（サマ語：Lohok mireh）」と呼ばれていることは、この湾が元々マングローブに覆われた汽水域で、サンゴ礁の海とくらべ「赤い」土の湾と記憶されてきたことを示している。

2.2 バンガイ諸島のサマ人による漁撈活動

K 村のサマ人による漁撈活動では、網漁、ダイナマイト漁、延縄漁を含む釣り漁、素潜り漁が確認され、これらは対象魚種や漁具によってさらに区別され（表 4）、このほかに採貝や魚類の蓄養、海藻養殖もみられた。主な漁法についてさらに詳細な調査をおこなった。

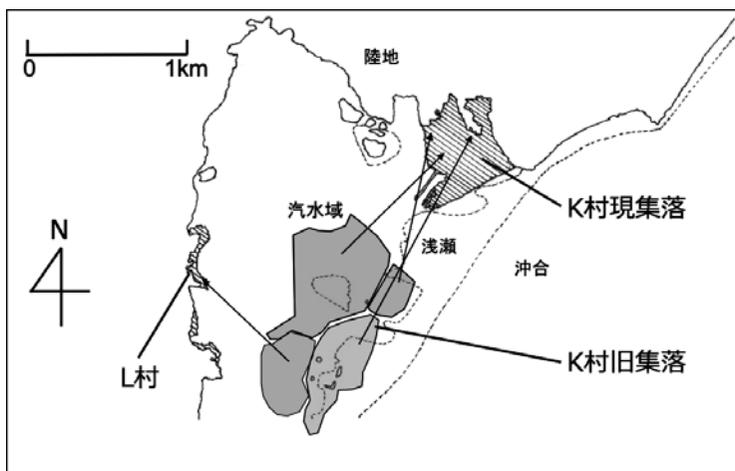


図 2 沖合に向かって続くバンガイ諸島 K 村の集落群
出所：Google Earth, 現地調査をもとに筆者作成。

表4 バンガイ諸島K村サマの漁撈活動

漁法		利用空間
網漁	刺し網漁	外洋や島沿岸部、浅瀬
釣り漁	手釣り	外洋
	疑似餌を使った手釣り（魚）	外洋
	疑似餌を使った手釣り（タコ）	外洋
	延縄漁（サメなど大型の獲物）	外洋
	延縄漁（小型の獲物）	外洋
素潜り漁	棒突き	外洋
	水中銃+鉛	外洋
	捕獲	外洋
ダイナマイト漁		外洋、島沿岸部
採集（貝類）		マングローブ域、浅瀬
海藻養殖（アガルアガルの栽培）		浅瀬
蓄養（活魚の養殖）		集落内、旧集落跡地

出所：現地調査をもとに筆者作成。

かつてサマ人が住居や漁のために用いてきた屋根つきの家船ソッペ (*soppe*) は現在利用されていない。ソッペには屋根つきの舟のほか、現存していない帆船、エンジンを搭載した小型の木造船の3種類が含まれる。現在多く使われる舟は、ココリ (*kokoli*) と呼ばれる木のくり舟で、これは2~3人乗りまたは1人乗りの型があり、いずれも集落内の移動や水汲みに利用される。ジョロル (*jolor*) と呼ばれる数人乗りの舟はエンジンが搭載されたものが多く、K村の漁船としては最大で、ダイナマイト漁など一度に大量の漁獲を得る漁で特に利用される。

最も一般的な漁船は、エンジンを搭載した1~2人乗りの木造船ボロトゥ (*bolotu*) である。住民らによれば、1970~1980年頃のエンジンが導入以前は、帆船ボロトゥ・ラヤー (*bolotu layah*) で季節風によって南方の漁場に数日かけて出漁していたが、導入後は風向の影響を受けなくなったことで東方の漁場が発見され、現在ではこの東の漁場群が主になったという。

K村の代表的な漁法について、(1) サマ語名、(2) 漁法の詳細、(3) 主な漁場、(4) 主な漁具、(5) 一度に従事する人数、(6) 隻数、(7) 従事する期間、(8) 漁の季節や時間帯、(9) 対象魚種を聞き取った結果を以下にまとめる。漁具の図はすべて筆者の現地調査による。

2.2.1 釣り漁

いずれも釣り竿を用いない手釣りによるが、単に糸先に針をつけた手釣りのほか、疑似餌釣り漁、延縄漁がある。このうち疑似餌釣り漁は、魚を狙うものとタコを狙うものに区別され、延縄漁は、サメなど大型の魚類を狙うものと小型の魚類を狙うものに区別される。

手釣りや魚を狙う疑似餌釣り漁は共通点が多いため、まとめて記載する。これらの漁はパミッシ (*pamissi*) と呼ばれ、主な漁場は外洋である。漁具は道糸を栴 (*カセ*) に巻きつけておいて、その先にさまざまな仕掛けをつけるものである。代表的な仕掛けであるロンゲン

(rongen) は、道糸に結んだ釣り糸（ハリス）と針・シンカーから成る（図 3）。また棒と道糸の先端に、三角形の小さなシンカーと釣り針を結んだいわゆるブラクリ針状のスギティガ（インドネシア語で *segi tiga*, 「三角形」の意。サマ語名は不明）（図 4）や、大きいシンカーから離して釣り針を取りつけたニャンカ（*nyangka*）（図 5）、道糸と釣り針の間に針金でつないだライヤン（*raiyang*）（図 6）などがみられる。

魚を狙う疑似餌釣り漁の漁具も、棒と道糸が基本となる。道糸の先端に釣り針を取りつけ、それを隠すように牛の毛（部位は不明）と裂いたビニールテープ、モンガラカワハギ科の皮を乾燥させたものなどをつけた毛針のような疑似餌釣り漁具マンチョー（*manchob*）（図 7）はその代表的なもので、シンカーの種類には個人差がある。より小魚に近い疑似餌としては、ス

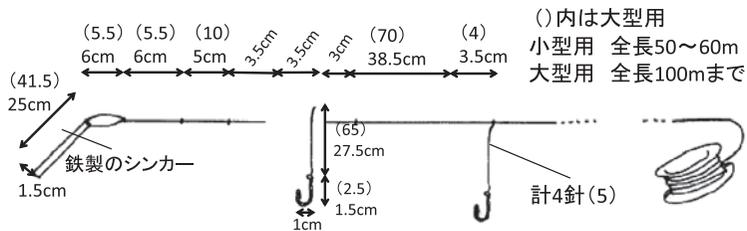


図 3 棒・道糸・釣り糸と針・シンカーから成る手釣り漁具ロンゲンの一例

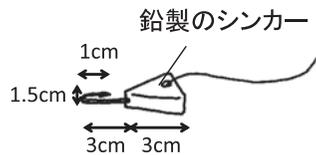


図 4 ブラクリ針のように道糸に装着する三角形のシンカー、スギティガの一例

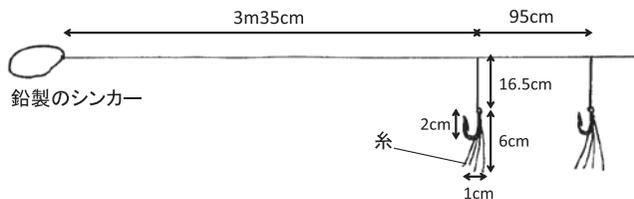


図 5 シンカーから釣り針が離れた手釣り漁具ニャンカの一例

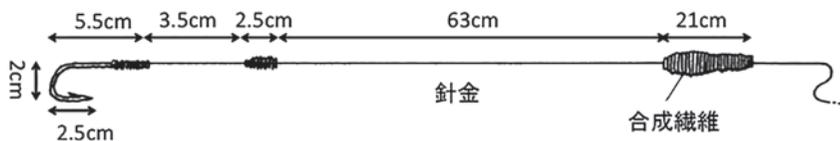


図 6 道糸と釣り針を針金でつないだ手釣り漁具ライヤンの一例

プーンを折り曲げるなどして作るスプーン式あるいはジグ式の疑似餌バレオン (*baleon*) (図8) や、冠型の釣り針とシンカーとセットになったエギ (餌木) のような疑似餌ドーア (*doah*) (図9), 木製またはプラスチック製のプラグ式ルアーのような疑似餌ボカル (*bokar*) (図10) がある。バレオンやボカルなどには、魚種や漁場に適したシンカーや棒・道糸が用いられる。

手釣り漁および魚を狙う疑似餌釣り漁は、男性友人同士や夫婦など2人が1隻でおこなう。季節性はなく午前中におこなわれる。対象はサバ科 (カツオなど), ハタ科, アジ科, カワハギ科, モンガラカワハギ科, ブダイ科, サワラ属, スズメダイ科, イットウダイ科などである。

一方タコを対象とした疑似餌釣り漁はパニポ (*panipo*) と呼ばれ、漁場は外洋である。タコ

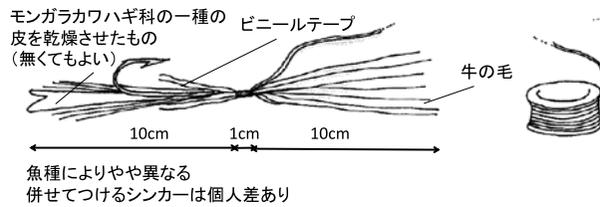


図7 牛の毛やモンガラカワハギ科の魚の皮を利用した疑似餌釣り漁具マンチャーの一例

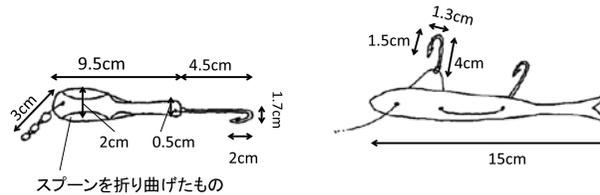


図8 スプーンなどから作るジグ式の疑似餌バレオンの2例



図9 冠型の釣り針とシンカーとセットになったエギ式の疑似餌釣り漁具ドーアの一例

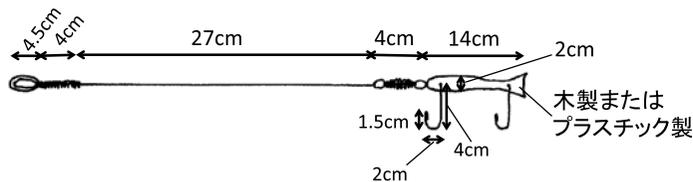


図10 疑似餌に釣り糸が取り付けられたプラグ式の疑似餌釣り漁具ボカルの一例

を狙う疑似餌釣り漁は、ホシダカラ (*bolleh*) とスプーンを用いてタコを模した疑似餌チポ (*cipo*)、サンゴ石を用いる疑似餌ガラガラ (*gara-gara*) (図 11) のいずれかの疑似餌を用いて、専用の釣り針パンゴエクイッタ (*pangoe quitta*) (図 12) で釣り上げる。漁は昼間に友人や家族など 1~2 名が 1 隻でおこなう。一年を通しておこなわれるが、季節によっては出漁に困難な漁場がある。対象はマダコ科である。

午前 6 時頃に出発する。漁場に着いたら、疑似餌チポやガラガラを海底まで下ろし、タコがおびき寄せられて水面近くに上がるのを待つ。水中眼鏡で舟から覗きこみ、タコが上がるのを確認し、疑似餌を引き上げながらゆらしておびき寄せ、最終的にはパンゴエクイッタで釣り上げる。

延縄漁はサマ語でパングドック (*panguddoq*) と呼ばれる。

大型の獲物を狙う場合、主な漁場は外洋である。延縄漁具はドック (*ddoq*) と呼ばれ、幹縄と枝縄から成るドックタンシ (*ddoq tansi*) (図 13) と、枝縄の先端に装着する釣り針ピッシ (*pissi*) (図 14) から成る。男性漁師とその親子兄弟 1~3 人が 1 隻でおこなう。季節に偏

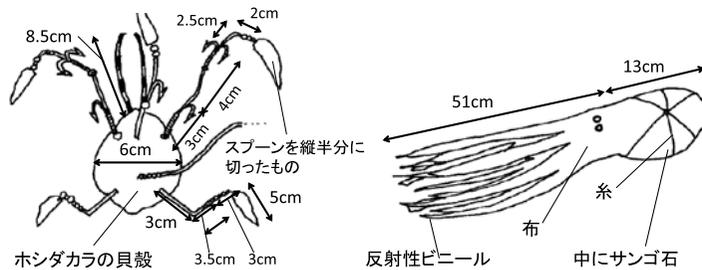


図 11 ホシダカラを用いた疑似餌チポ (左)、サンゴ石を用いた疑似餌ガラガラ (右) の一例

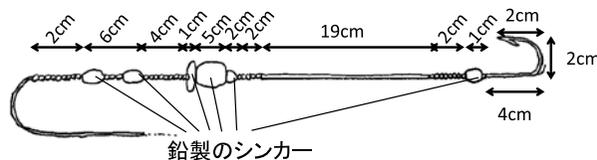
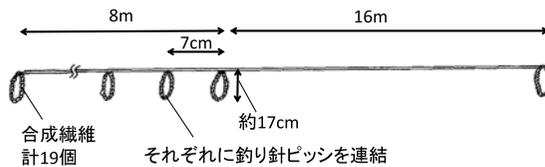


図 12 タコ用疑似餌と併せて使用する専用の釣り具パンゴエクイッタの一例



※両端部にブイ、サンゴ石を連結

図 13 小型の獲物用の幹縄・枝縄ドックタンシの一例

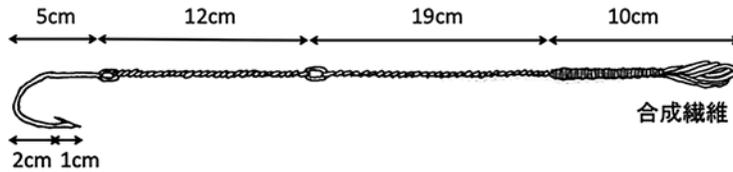


図 14 小型の獲物用の釣り針ピッシの一例

りはない。対象魚はサメやエイ、カジキ科などである。漁は午前～夕方のおこなうか、2～3日かけておこない、数日かかる場合は、周辺の島沿岸部に点在する漁撈用の杭上家屋ブバロ (*bebaro*) を利用する。旧集落の時代、サメ延縄漁をおこなう漁師は多く、エンジン導入以前は、南北の季節風を利用してペレン島以北からバンガイ島以南までの広い範囲に出漁していたという。エンジン導入後は東方の漁場でもおこなわれるようになったが、最近ではサメ延縄漁師自体が減少傾向にある。

続いて小型の獲物を狙う場合も主な漁場は外洋で、延縄漁具ドックを用いる。対象はアジ科、ブダイ科、ハタ科などである。大型の獲物を狙う漁との違いは、幹縄・枝縄のドックタンシに装着する釣り針ピッシの数と大きさである。個人によるが、釣り針ピッシの数は60個や100個程が装着される。男性漁師や夫婦などから成る1～3人が1隻でおこなう。季節性はなく午前～夕方におこなわれる。

2.2.2 ダイナマイト漁

ダイナマイト³⁾ 漁はサマ語でパニンバック (*panimbaq*, 漁撈用ダイナマイトと同義) と呼ばれる。特定の漁場を選ばず、沿岸部のみでも十分な漁獲が得られるという。近年では、経験が必要とされず手軽に多くの漁獲が得られることからダイナマイト漁が増加し、政府の取り締まりにもかかわらず続けられている。爆発後に潜水して魚を収集するため、収集用の網、潜水マスク、足ビレを用いる。漁をおこなうのは男性1～3人であり、友人や兄弟・家族などが1隻に乗る。年を通じておこなわれるが、北風の季節は海流が温かく、魚が上昇してくるので特によいとされる。船が小さいので強風の季節は出漁が難しく、南風の季節でも、場所によっては越えることができないとされる。対象となるのは、ハタ科、フエダイ科、ブダイ科、アジ科(クサヤモロなど) などである。

午前2～4時頃に出漁し、漁場へ着いたら十分な漁獲があるまで通常2～3時間おこない、午前9～12時頃までに帰漁する。漁場では、海中を覗いて魚が見えたら、導火線に電池を繋

3) インドネシアでは肥料として売られる硝酸アンモニウムを用いた爆発物も多く用いられる。K村で観察された漁撈用ダイナマイトの製造工程は[中野 2018]を参照のこと。原料となる肥料(ウバ)は5ヵ月に1回程度、約10名ほどで船に乗って訪れるバウバウ人から購入する。価格1万5,000Rp/袋(1Rp=約0.01円, 2017年12月)。

げ遠くあるいは下へ投げ爆発させる。その後、マスクを装着するか素潜りで魚を収集用の網に入れる。網にいっぱいになったら船に移し、また潜るという作業を繰り返す。この間、船上の者は操船する役割がある。多いときは1回の漁で5~6個のダイナマイトを持っていくこともあるが、平均は3個程度である。使いきった後に手持ちの漁具で魚を続けることもある。

2.2.3 素潜り漁

素潜り漁⁴⁾はパヌウン (*panuung*) と呼ばれる突き漁や採捕がそれに相当する。漁場は後述するが、外洋上に出現する離れ岩トゥコー (*tukoh*) や岩礁の陰である。男性1~3人が1隻でおこなう。漁具は、アイゴ科、ベラ科などの魚を狙う銚パンガジャック (*pangajaq*) (図15)、大型の銚サパー (*sapah*) (図16)、籐(ヤス)のバチガ (*baciga*) (図17)、組み立て式の籐が挙げられる。バチガは、柄のイディ (*idi*) (図18) に、獲物に応じて4種類から選ば



図 15 銚パンガジャックの一例

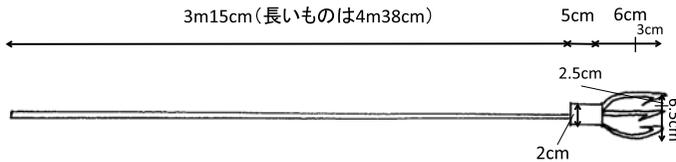


図 16 大型の銚サパーの一例

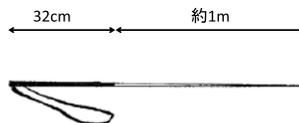


図 17 籐のバチガの一例



図 18 組み立て式籐の柄イディの一例

4) かつてはバンガイ諸島の素潜りのサマ人たちを雇うマカッサル人船主の漁船があったといい、10名ほどの青年たちがアコヤガイの採貝に従事した。K村からも多くの少年・青年が参加した。出漁すると1ヵ月程度は集落に帰れない。1990年代後半以降この船が寄港しなくなったことを機に、素潜り漁から手釣りに転換する者も多く、かれらはその後水中マスクが導入されて再び素潜り漁を始めた。

れる先端部（エイ用，魚用，ウミガメ用）（図19～21）やそのほか大型の獲物用の先端部バカル（*bakal*）（図22）を装着する。水中銃インド（*indo*）（図23）やセミアビ科などの捕獲漁具パニェッコー（*panyekkoh*）（図24）もみられる。これらの素潜り漁は季節を問わず深夜におこなわれ、懐中電灯や集魚用ケロシンランプも用いる。

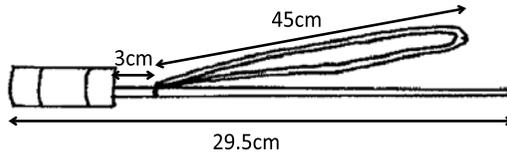


図19 イディに取りつける，エイ用の先端部の一例

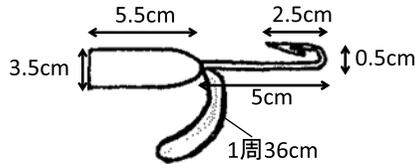


図20 イディに取りつける，魚用の先端部の一例

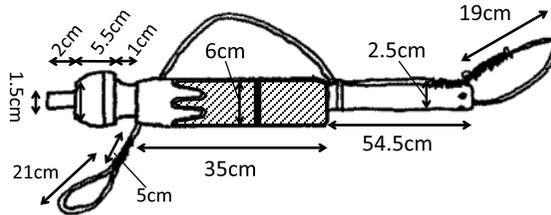


図21 イディに取りつける，ウミガメ用の先端部の一例

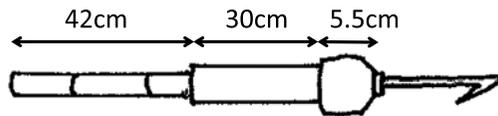


図22 イディに取りつける，大型の獲物用の先端部バカルの一例

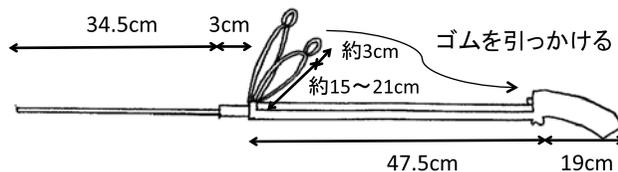
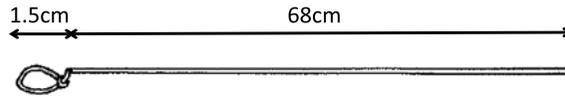


図23 水中銃インドの一例



獲物の胴体に輪をかけて、柄を引く

図 24 捕獲漁具パニェッコーの一例

2.2.4 網漁

先行研究によるとサンゴ礁の発達した地域のサマ人漁法は網漁が中心であったが、K 村では刺し網漁のみがみられた。この刺し網漁は、サマ語ではパンガリング (*pangaringi*) と呼ばれ、主な漁場は島沿岸や外洋である。主な漁具はリング (*ringi*) (図 25) と呼ばれる網である。漁に従事するのは男性中心であり、親子や兄弟 3~4 人、あるいは男性 1 人や、夫婦 2 人が 1 隻でおこなう。漁の期間は 1~3 日であり、季節性はない。漁場に到着して、まず網を設置して 1 時間ほど待つ。引き上げて魚を網から捕ったら、2 回目の設置をする。この際に設置場所を変更することもある。再設置から 1 時間ほど待ち、引き上げる。先述のブバロで休息をとることもある。1 日に 3~4 回設置することもあるが、これらは漁場や魚種、網の種類により異なる。

網の種類ごとに対象魚種が異なり、本調査では以下の 5 種類が確認された。

- ・リング・タンバン (*ringi tamban*) : 網目が約 0.5 cm, 小魚用
- ・(名称不明) : 網目が約 5 cm, 対象は不明
- ・(名称不明) : 網目が 6.4 cm, 対象は不明
- ・(名称不明) : 網目が 15 cm, 対象は小型のエイ
- ・リング・リンカラン (*ringi lingkaran*) : 対象はカツオの仲間, アジ科の魚など

以上のような K 村で現在みられる漁撈活動の特徴は、サンゴ礁域とは異なり、最も一般的な漁法が外洋における釣り漁であること、個人あるいは少人数による漁が多いことにある。サンゴ礁域のサマ人の漁撈の特徴が「卓越したサンゴ礁域における多様な沿岸性漁撈」である一方、バンガイ諸島周辺は「マルクーバンダ海に特徴的な回遊性資源を狙う釣り漁」[小野

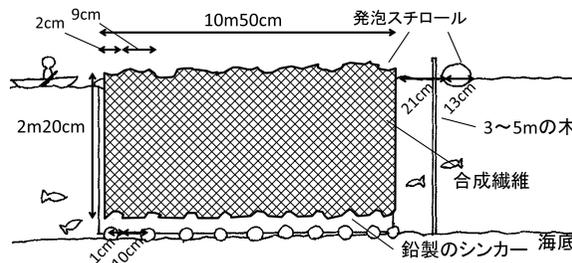


図 25 刺し網リング・タンバンの一例

2011: 432] もおこなうとされてきたとおり、K村でおこなわれる釣り漁でも、外洋の回遊性資源は一般的な漁獲対象であり、サンゴ礁・岩礁棲の魚に依存していない。

2.3 漁場

K村には、GPSや魚群探知機など漁場の位置を特定する機械はない。しかし、たとえばある日の出漁ルートをGPSで記録したところ、往復移動距離にして約47.32キロメートルであった。外洋でこの距離の漁撈をおこなうには、特定の漁場の位置を到達経路とともに記憶する技術と、海上で自船の位置を把握する技術が不可欠である。

まず漁場について、釣り漁を中心とする主な漁法のために少なくとも29カ所の漁場が利用されていることがわかった。これらは海底微地形の違いによって区別され、ラナ (lana)、パンギリ (pangiri)、ティンプス (timpusu)、パマンガン (pamangan) の4種類に分類されることが確認された。

特に多く利用されていたのはラナで、これは堤のように盛り上がった海底とその外縁部を指す。海底の形状はラナに似るが、堤の面積がラナよりはるかに広いものがパンギリ、やはりラナに似ているがより深く狭いものがティンプスである。一方、パマンガンは海底地形に共通した特徴をもたず単に「釣る場所」を意味するものである。ラナ型漁場は、全29カ所のうち17カ所を占め、パンギリ型漁場は5カ所、ティンプス型漁場は3カ所、パマンガン型漁場は4カ所であった。29カ所の漁場の分布と型は図26に示すとおりである。

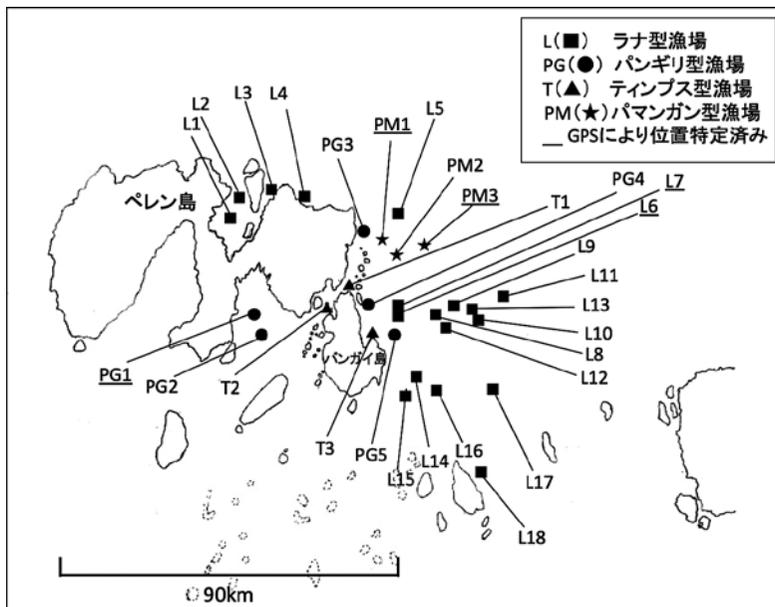


図26 K村のサマ人漁師が利用する漁場の位置関係

出所：現地調査。

これらの分類は由来（形容）を加えて識別され、地形・場所、生態、発見者、故事に由来して語彙が付与されるが、由来不明とされるものもあった。これら集団全体で共有される漁場とは別に、個人が秘匿する漁場も存在するというが利用頻度は高くない。ラナ型漁場を GPS や海図を用いて調べたところ、いずれも島棚を含む外洋に位置することがわかった。漁について在来の規制法や管理方法は確認されず、これは K 村内外のサマ人に対しても非サマ人に対しても同様であった。

外洋に点在する 29ヵ所もの漁場に到達するため、サマ人漁師たちはいくつかの位置特定方法を利用している。その中心的なものは、日本でいうヤマアテのように、海上から見て特徴的な山や島の一部を目標物として捉え、その見えかたによって自船や漁場の位置を特定する方法である。K 村のサマ人漁師たちが実際に利用する目標物には、離れ岩トウコー、岬 (*toroh*)、湾や特定の海域、山や島の遠景、魚類や鳥類、天体がある。しかも季節風や月齢、時間帯、自船の位置に応じて、目標物の組み合わせは柔軟に変わる [中野 2018]。K 村の漁師が利用するトウコーは、すべて固有のサマ語名称をもつ 15ヵ所が確認された。海から見た陸の風景を K 村のサマ人漁師たちは詳細に記憶しており、たとえばバンガイ島最北端から東回りに連続する数十ヵ所の陸上の目標物の順番を、かなり正確に、また地理的特徴とともに記憶していた。

2.4 海の空間分類

K 村においては漁がおこなわれる外洋は、日常的な生活の空間ではなく、距離的にも感覚的にも遠く離れた空間である。かれらは、生活の場から離れた 29ヵ所の特定の漁場空間や、それらの間に広がる空間についてどのように認識しているのだろうか。聞き取り調査の結果明らかになった海の空間分類について述べる。

ここでは K 村周辺を海岸と平行・垂直の 2 方向に分けて示し、先述の漁場を含む外洋域を加えて、計 3 つの概略的立体図を示す。作成範囲として① K 村のある北東から旧集落のあった南西へと島伝い方向（海岸と平行）、②陸から湾を通過して外洋への方向（海岸と垂直方向）について擬似的なライントランゼクトを設定し（図 27）、それぞれに作成した（図 28～30）。概略的立体図の作図法はいずれも [渡久地・吉川 1990; 長津 1997; 渡久地・西銘 2013] を参考にした。

まず海岸線と平行方向にみた場合の海の空間分類（図 28）には、満潮時にも出現している砂の浅瀬であるブンギン (*bungin*)、干潮時に出現する岩礁域（一部にサンゴ群体含む）であるサバ (*sapa*)、ある種の石や岩が一部海面にも出ている浅瀬テンボ (*tembo*) がみられる。図中のブンギン、サバ、テンボは旧集落の範囲であり、かつてそれぞれブブンギン (*Bubungin*)、ササバ (*Sasapa*)、テンボという名前の小集落だった。またサマ語で「通り過ぎる場所」を意味する海域ルッパサン (*luppasang*) は集落内外の人の往来が多い船溜りのような場所で、これもひとつの小集落だったという。ブンギン、テンボ、サバと、その周辺にあるごく浅い海

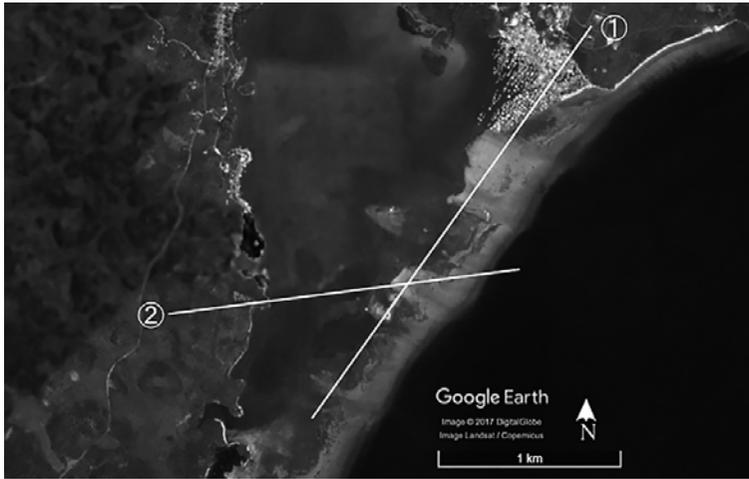


図 27 概略的立体図範囲を作成したライントランゼクト①と②の位置関係
出所：Google Earth Pro.

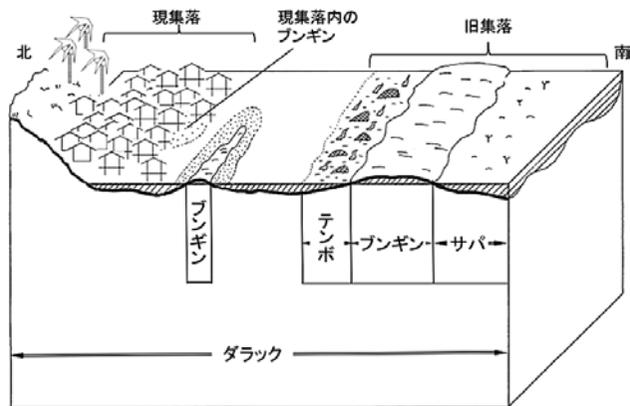


図 28 擬似的トランゼクト① (図 27: 海岸線と平行方向) に相当する K 村現集落から旧集落にかけての概略的立体図

域，山を含む陸地などをすべて包括した分類をダラック (*daraq*) という．なおダラックはインドネシア語で陸地を意味するダラット (*darat*) と同義で用いられることもある [Akamine and Nagatsu 2007]．

次に，海岸線と垂直方向にみた場合の海の空間分類 (図 29) には，陸側から順に，砂浜シッディ・グソー (*siddi gusoh*)，岩場シッディ・バトゥ (*siddi batu*) がある．サバ，ブンギンを過ぎると次第に深くなり，外洋となる．ここでは，浅瀬やサンゴ礁域から離れ，深くなっていく海域から先のすべての海域がシッラー (*sillah*) とされる．先述のように陸地からシッラーの手前まではダラックであり，シッラーからはディラオ (*dilao*) となる．なおディラオはインド

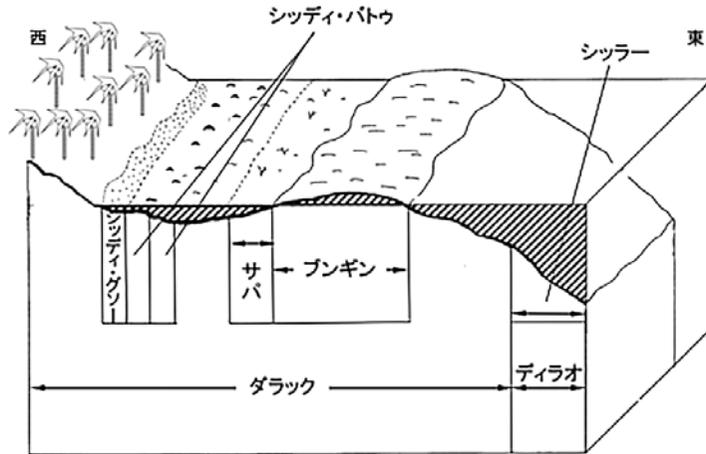


図 29 擬似的トランゼクト② (図 27: 海岸線と垂直方向) に相当する L 村周辺から外海にかけての概略的立体図

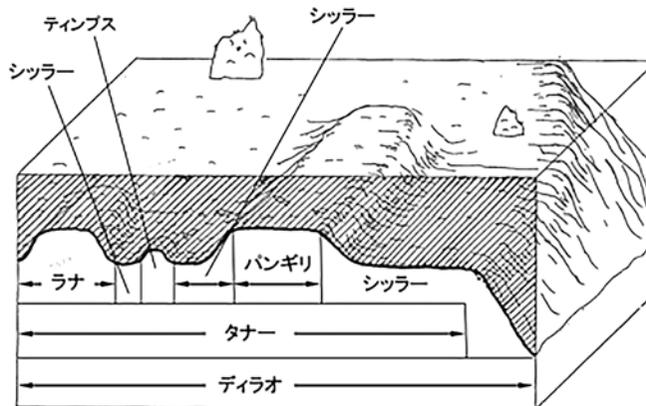


図 30 擬似的トランゼクト③外海に相当する L 村周辺から外海にかけての概略的立体図

ネシア語で海を意味するラウト (*laut*) に相当するとされることもある [Youngman 2005].

次に、外洋の空間分類 (図 30) をみると、漁場のラナやティンブス、パンギリが点在し、これら以外のすべての外海はシッラーとされる。一方で、そもそもラナやパンギリなどは大きな島棚のような海底の上にあり、この島棚全体を「土地」や「地面」を意味するタナー (*tanah*) と呼び、タナーを越えたところをシッラーとすることもある。さらに、このタナーやシッラーもすべて含めてディラオと表現される。

以上のことから、海の空間分類の特徴は次のようにまとめられる。まずダラックとディラオは、先行研究でも報告されているようにインドネシア語の「陸」と「海」に類似するが、K 村のサマ人にとってのダラックは陸地だけでなくサンゴ礁域や、潮汐によっては水没する浅瀬も

含んでおり、ディラオはブンギンやサパの周辺などの浅い海を含まない点で、「陸」と「海」に対応する語彙ではない。なお、聞き取りのなかでディラオと、ダラック内の海域のどちらも包括する語彙を尋ねると、インドネシア語の「ラウト (*laut*)」が挙げられるか、「ない」と返答された。本研究ではダラックとディラオはそれぞれ「陸的」空間と、「海的」空間を指すものであると定義する。

それからシッターという語彙には複数の意味がある。湾岸部 (図 29) にみられるシッターは、浅瀬やサンゴ礁域でないすべての海域空間を指す語彙である一方、外洋 (図 30) にみられるシッターは、島棚タナー以外のすべての海域空間である。こうしたことから、シッターを単なる外洋ではなく、居住空間である浅瀬や日常的に漁撈活動をおこなうスポットをつなぐ「道的」空間として捉えることもできる。スル諸島では、サンゴ礁を超えた深い海、つまり外洋は「*s'llang*」というサマ語で表現される [長津 1997]。バンガイ系サマ語では「ng」が「h」に転ずる傾向があることから、これはシッターに対応するとみられる。しかし、K 村のシッターは、サンゴ礁を超えた外洋を意味する一方で (図 28)、島棚のうちラナなどの漁場を除いた空間も意味するため (図 30)、その意味範疇は合致しない。

3. 「面的」認識と「スポット」的認識

先行研究において、サンゴ礁の発達した海域で沿岸性漁撈をおこなうサマの空間認識の特徴は「面的」記憶であるとされた [長津 1995]。ここでいう面的記憶とは、たとえば礁原のなかにおいてもどこが浅い区域でどこが深い区域であるとか、どこに海藻が分布していてどこがサンゴ礁群体になっているか、といったように海底構成をある程度の面積をもった区域として記憶しているということである。この場合、どういう区域を通過していけば目的の漁場に到達できるのかという知識があればよい。

この面的記憶と対比されるのが、日本でいうヤマアテのように点と点を結んだ線によって漁場を特定するもので、これは「線的」空間認知といえる [長津 1995]。K 村の空間認識は「線的」空間認知に近いが、以下に述べるとおりさらに特徴的な認識がみられる。

K 村漁師が外洋漁撈をおこなう場合には、陸上の遠景を用いた線的認知に加え、魚や鳥や天体を参照することもあるし海底を視認しようとすることもあり、これらを組み合わせてより正確に漁場を特定する [中野 2018] (表 5)。つまり、漁場というスポットについて、その中心ほどさまざまな漁撈知や生態条件を参照し、認知・記憶が分厚くなるのであり、外側に行くほど認知・記憶の対象が薄くなるのである。K 村漁師の認知・記憶は、海面と垂直・平行方向に広がっていることから、かれらの認知は「波紋」的・三次元的といえる。

空間認識についていえば、サンゴ礁域では、海底微地形の窪みなどわずかな特徴の記憶による小分類が、広範囲に途切れることなく存在する。一方で外洋の認識では、細かな特徴には関

表 5 サンゴ礁域のサマと K 村のサマの漁撈活動の特徴

	サンゴ礁域のサマ	バンガイ諸島 K 村のサマ
集落の位置	石灰質の堆積物を底質とする浅瀬	砂泥地, 汽水域, 石灰岩による人工島, 陸地
漁法	多様な網漁をはじめとする沿岸性漁撈	釣り漁をはじめとする外洋漁撈
出漁人数	小規模, 例外として集団の追い込み漁	小規模
対象漁獲	主に沿岸性資源	主に回遊性資源
漁場	サンゴ礁空間	外洋
位置特定方法	海底微地形の視認	ヤマアテ, スターナビゲーション, 海底微地形の視認など複数
自然条件	サンゴ礁空間の潮汐の変化	複雑な季節風
空間認識	「面的」	スポットと波紋

出所: [長津 1997; 小野 2011], 現地調査より筆者作成。

表 6 異なる漁場利用空間の空間認識

	サンゴ礁域	外洋
視認の対象	海底	海底—海中—海面
語彙付与の範囲	面的, 連続的	スポット的, 断続的
空間分類の特徴	具体的	抽象的
感覚	日常的空間	非日常的空間

出所: [長津 1995, 1997] および現地調査をもとに筆者作成。

心が払われずに形成された大分類が多い。沿岸から外洋までをみると、大分類のなかでスポット的・断続的に認識の密度が濃くなる地点があり、これが漁場でもある。漁場利用空間に対する感覚をみると、前者のサマ人の漁場であるサンゴ礁域は、居住空間であり漁撈空間でもあるため、かれらにとって日常的な空間といえる。一方、K 村のサマ人の漁場である外洋は、居住空間から離れており、距離的にも感覚的にも非日常的空間であるといえる (表 6)。

K 村では人々は「陸的」な場所で日常生活を送り、漁のときに「道的」空間を通して「海的」空間を利用する。これは先行研究がおこなわれたサンゴ礁域では、そこで生活して漁もするという、日常的空間のなかですべての活動が完結することと対照的である。K 村の空間分類の語彙量はサンゴ礁域と比べて少ないが、このことは非日常の空間では分類語彙が発達しなかったためと考えられる。逆にいえば、分類語彙が少なくても、非日常的な空間に多様な漁場をもち、それを特定して利用するためには、波紋型の空間認識がより有効なのである。

ただしサンゴ礁域のサマであっても海上を全く認識しないわけではない [長津 1995]。このような空間認識の特徴は二者択一的なものではなく、居住・利用している地理的条件に応じて、面的記憶が強くなるか、波紋的認知が強くなるかで表出される傾向の違いとして理解するべきであろう。

おわりに

本研究では、非サンゴ礁域で生活し、外洋漁撈をおこなうという、これまで報告されてこなかった特徴をもつサマ人に着目し、かれらの漁法、漁場利用や空間分類を通して、この地域に特異的な海の空間認識のありかたを明らかにした。これまでサンゴ礁の発達した地域で沿岸性漁撈をおこなうサマの特徴が典型例のようにみられてきたなかで、K村サマの漁撈が先行研究でみられたものとは異なることを明らかにしたことは、今後のサマ研究においても重要な糸口となる。サマ人は、広範囲に拡散居住していることが特徴であり、しかも近年では定住化や自然災害の影響でその地理的条件が異なることも珍しくない。そのため今後他の環境におけるサマ人を調べることでこそ、かれらの空間認識や知識の全体像を明らかにできるだろう。

謝 辞

本研究の現地調査に際しては、インドネシア共和国科学技術省（RISTEK）より調査許可を発行いただいた。バンガイ諸島の方々にも心よりお礼を申し上げる。研究に際しては、国立ハサヌディン大学の Dadang Ahmad Suriamihardja 教授、Tasrifin Tahara 教授、講師の Nur Hasanah 先生、東洋大学の長津一史准教授（当時）からご協力を賜り、学術的なご助言をいただいた。また、本研究のための調査は、独立行政法人日本学生支援機構奨学金、京都大学学際・国際・人際融合事業「知の越境」融合チーム研究プログラム（SPIRITS）（平成28年度採択、代表：古澤拓郎）、旅の文化研究所第24回公募研究プロジェクト（採択課題「国境なき海域ネットワークと漁撈知に基づく『漂海民』バジャウの移動に関する研究」）、2017年度平和中島財団日本人留学生奨学生の助成によっておこなわれた。これらの機関ならびに関係者の方々に感謝申し上げます。We would like to thank Editage (www.editage.jp) for English language editing.

引用文献

- 青山和佳. 2006. 『貧困の民族誌—フィリピン・ダバオ市のサマの生活』東京大学出版会.
- 秋道智彌. 1995. 『海洋民族学—海のナチュラルリストたち』東京大学出版会.
- 卯田宗平. 2000. 「琵琶湖における船上からの陸地景認識に関する研究」『ランドスケープ研究』64(5): 751-754.
- 小野林太郎. 2007. 「ボルネオ島サマ人による漁撈の『近代化』と『伝統』—陸サマと海サマによる漁撈の比較をとおして」『国立民族学博物館研究報告』31(4): 497-579.
- _____. 2011. 『海域世界の地域研究』京都大学出版会.
- 渡久地健・西銘史則. 2013. 「漁民のサンゴ礁漁場認識—大田徳盛氏作製の沖縄県南城市知念『海の地名図』を読む」『地理歴史人類学論集』4: 77-102.
- 渡久地健・吉川博也. 1990. 「サンゴ礁地域の開発と保全—生活者の視点から地域形成を考える」サンゴ礁地域研究グループ編『熱い自然—サンゴ礁の環境誌』古今書院, 300-316.
- 床呂郁哉. 1992. 「海のエスノヒストリー」『民族学研究』57(1): 1-20.
- 長津一史. 1995. 「フィリピン・サマの漁撈活動の実態と環境観—民俗環境論的視点から」京都大学人間・環境学研究所文化・地域環境学専攻修士学位論文.
- _____. 1997. 「海の民サマ人の生活と空間認識—サンゴ礁空間 t'bbā の位置づけを中心にして」『東南

- アジア研究』35(2): 261-299.
- _____. 2004. 『正しい』宗教をめぐるポリテクス—マレーシア・サバ州, 海サマ人社会における公的イスラームの経験』『文化人類学』69(1): 45-69.
- _____. 2012. 「異種混雑性のジェネオロジー—スラウェシ周辺海域のサマ人の生成過程とその文脈」『民族大国インドネシア—文化継承とアイデンティティ』木犀社, 249-284.
- _____. 2018. 「東南アジアにみる海民の移動とネットワーク—西セレベス海道に焦点をおいて」小野林太郎・長津一史・印東道子編『海民の移動誌—西太平洋のネットワーク社会』昭和堂, 148-177.
- 中野真備. 2018. 「中部スラウェシ・サマ人の漁撈知—時空間利用の民俗技術に着目して」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻博士予備論文.
- 安室 知. 2005. 『自然を生きる技術—暮らしの民俗自然誌』歴史文化ライブラリー (204). 吉川弘文館.
- _____. 2016. 『自然観の民俗学—生活世界の分類と命名』慶友社.
- Akamine, Jun and Kazufumi Nagatsu. 2007. *Word and Sentence List for Sama/Bajau Languages*. Sulawesi Area Studies: Kyoto University & Universitas Hasanuddin. (http://sulawesi.cseas.kyoto-u.ac.jp/final_reports2007/article/47-akamine.pdf) (2018年11月16日)
- Grimes, Barbara F. 2000. *Ethnologue: Language of the World*, 14th edition. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Neal, Christina. 2000. TSUNAMI NEWS: Tsunami Event: Sulawesi, *TsuInfo Alert* 3(2): 1.
- Nimmo, H. Arlo. 1968. Reflections on Bajau History, *Philippine Studies* 16(1): 32-59.
- Pallesen, K. 1985. *Culture Contact and Language Convergence, Linguistic Society of the Philippines*, Monograph Series, No. 24. Manila: Linguistic Society of the Philippines.
- Sather, C. 1985. Boat Crews and Fishing Fleets: The Social Organization of Maritime Labour among the Bajau Laut of Southeastern Sabah. *Contributions to Southeast Asian Ethnography* 4: 165-214.
- Sopher, David E. 1977 (1965). *The Sea Nomads: A Study of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. Singapore: National Museum of Singapore. (reprinted in 1977 with postscript)
- Tony, J. Whitten., Greg. S. Henderson and Muslimin Mustafa. 2012. *The Ecology of Sulawesi*, The Ecology of Indonesia Series, Volume 4. Hong Kong: Periplus Editions.
- Youngman, Scott. 2005. *Summary of Bajau Lexicostatistics Project (through October 1989)*. Dallas: SIL International.